

アジア時報

昭和45年 09月 03日 第3種郵便物認可
昭和51年 9月 1日 発行
毎月 1回 1日 発行
通巻 第77号

9

1976

変動過程にある中国

天安門事件以後の中国

インドシナ情勢とその周辺の問題

社団法人 アジア調査会

天安門事件以後の中国

—事件の背景と経過の中から—

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学助教授)

はじめに

きょうは天安門事件以降の中国内政の問題を中心に話してみたいと思いますが、それにはどうしても、もう一ぺん、周恩来の死以降、幾つか明らかになったこと、疑問に残っていることを整理してみなければいけないと思うし、天安門事件そのものについても、一事件の基本的な構造を、どういふふうにつかまえるべきかということ、考えるべきことがたくさんあるように思う。

考えてみると、毛沢東は、かつて文化大革命のときに、「マルクス主義の道理はいろいろあるが、つきつめて言えば、造反有理——謀反には道理がある——という一語につ

きる」と言ったわけですね。

それからまた、中華人民共和国の新しい憲法第二十八条は、「公民は、言論、通信、出版、集会、結社、デモ、ストライキの自由を有する」といふふうに規定したわけですが、考えてみると、今回の天安門事件は、まさにそういう意味では、「造反有理」であったわけですし、そのとおりデモであり、示威であったわけです。

しかしながら、これは結果的には、ああいう処断を受けることになったわけです。

一方、天安門事件に揭げられた多くのスローガスを見てみると、圧倒的なものが、周恩来に対する追慕、敬愛の念を表明したものである、という事実がある。

同時に、周恩来に対する追慕の情と、まさに裏腹に出てくるのが、毛沢東側近——特に姚文元、江青に対する批判でして、これまた、ある人は、当時の天安門の状況を見て、中国にルネッサンスが起こったのではないかと、といわれるほど、非常に文学的な才能を駆使して、ありとあらゆる詩の形式がはらんし、それらの多くは、姚文元、江青の批判であったわけだ。

こういうものを見てみると、ほぼ事件の基本構造というのは、わかるわけですがご承知のように、党中央は、この基本構造を決して認めるわけにはいかないのとして、いわば事件の基本構造をすりかえて、たまたま走資派批判の中で、焦点にあてられていた鄧小平批判に、いわば本質をすりかえて、鄧小平をスケープゴートにし、走資派批判、鄧小平批判的を絞って、事件を説明したわけです。

ここに実は重大な問題のすりかえがあったわけだとして、このすりかえというものが、その後の中国に起こっている、幾つかの不透明、あいまいな政治的な雰囲気というものと、決して無関係ではないのではないかと思うわけです。

そこが、私の基本的な前提です。

ともかく中国ではその後周恩来に次いで朱徳も亡くなった。朱徳に対して、おそらく、中国民衆の多くの気持は、あえて彼が今さら政治の潮流に棹さすことをせずとも、と

いのではないかと思う。

ただ、もう一方この問題を考えていて、私自身、中国認識を改めたわけですが、今回の事態は、まさに驚天動地の、思いもよらぬ事件が、北京という、そしてその聖地である天安門広場で起こったわけですが、考えてみると、これは毛沢東自身が幾たびか挑戦して、遂に捕えることができなかった、中国社会の非常に茫洋とした柔構造、ないしは非常に密教的な性格というものを、明らかに露出しているのではないかと。

ひょっとすると、我々が考えている中国というのは、いわばフォーマルな中国でしかないわけだとして、もっともっと根の深いインフォーマルな、あるいは密教的な社会というものが、そこに存在をしていた、それがぼっくりと顔をあげたような気もするわけです。

ある意味では、毛沢東時代というものが今終りつつある、そういう中で、この事件が起こったということは、私が申すまでもなく、中国の歴代五朝末期の、ある種の兆候にも類似した状況ですし、あるいは中国という、ある種の悠久の伝統の世界の不易の性格を、見せつけたわけでもあります。

そういう中国社会の根深さの中では、あるいは毛沢東思想も、マルクス・レーニン主義も、いずれも、イデオロギー的な外皮に過ぎないのではないかということさえ感じ

もかくも中国革命を担った最長老として、毛沢東政治の最後の帰趨を見届けてほしい、こう思っていた人物物でしょうけれども、その彼も、今は逝ってしまったわけです。

そういう状況の中で、いよいよ中国は、毛沢東以後の時代に、急ピッチで移行しつつあると思う。

それだけに、このあいだの天安門事件というものは、まさに、非常に多くの意味を持った事件でして、この事件についての、ある種の政治社会学的な分析というものを行っておくことが、我々としても必要なことではないかと思う。

露出された「もう一つの中国」

私自身も、この事件のあと、二、三のものに書いたように、この事件はそれいかに理由づけようとも、中国社会の基底に存在する毛沢東政治への根強い批判の潮流を、改めて確認させずにはおかなかったと思う。

例え、この事件が、中国共産党中央の言うように、鄧小平による陰謀であったとしても、いわゆる走資派批判のただなかで、このような陰謀が、あのような大衆的基盤をもって実現したのですから、まさにその陰謀は、大衆的基盤を持つわけです。

毛沢東の言葉を借りれば、それこそ謀反であり、革命であり、レジスタンスであるというふうに考えなければいけない。さてたわけです。

もとより、そういう事件でしたが、中国共産党中央は、先ほど申し上げたように、これをもっぱら鄧小平批判と結びつけ、そして、この事件の深い根というものを、当面の路線闘争にすりかえて説明せざるを得なかったわけだ。

しかしながら、もしそうだとすれば、そこには幾つかの疑問が、たちどころにあがってくるわけだとして、果たして事件の性格というものは、走資派の画策した、反革命陰謀事件であったのかどうか、事件当日鄧小平擁護のローガンは、皆無でして、このことからしても、私が先ほど若干申し上げましたように、事件の基本構造は別のところにあったということが、明らかではないかと思うわけです。

それを、もう一度要約するならば、いわば今日の中国社会の内部にうず巻くさまざまな潮流、あとも申し上げるように、天安門事件というのは、単なる周恩来グループということではない、中国社会を非常に憂うる人、あるいは極左派を含む、現在の社会に対する欲求不満分子、それから、かつての紅衛兵や現在の若い青年たち等々、いろいろの潮流のものが混在していると思うが、そういうものが清明節を期して、故周恩来総理をしのぶという一点で、大きく合流し、収斂したわけです。

ですから、このような流れというものは、やはり非常に大きな意味を持つわけです。

それが毛沢東健在下においてさえも、露出しだしたということは、今後の中国に多くの問題を考えさせられると思う。

「反文革」の潮流

一方、その反面で、これらの潮流というものは、今日の毛沢東政治を担っている、いわゆる文革派、毛沢東側近への痛烈な批判を意味している。つまりある種の「反文化大革命」であったことはいまでもないわけだ。

例の人民日報の記者と、新華社の記者が合作で、事件の翌々日、天安門事件の報道を詳細にいたして、その中に皆様もお読みにになったと思うけれども、非常に痛烈な詩を紹介している。

たとえば、「……中国は過ぎし中国にあらず、人民もおろかさ極まれるものにあらず」とか、「秦始皇帝の封建社会ではもうないんだ」「マルクス・レーニン主義を去勢するやからは引き下がれ」というような、「自分たちは、真のマルクス・レーニン主義のために、血を流し、命を捨つるとも、がんばるんだ」「四つの現代化をなし遂げた晩には」「酒を備えて祭らん」というような詩が、『人民日報』で紹介された。

これは、ある意味で、かつての「五七二工程紀要」を思わせるような問題が、そこに含まれているわけですね。

いるわけですが、今回もそれをもじって、「冷眼蓬雀翻妖風」つまり、みだらなイデオログたちが、妖風を吹き散らすのを、冷やかに自分たちは見ている——この妖風というのは、「妖」は「姚」で姚文元にかけているわけです。それで「熱血一腔染江流」——中国をもう一度再革命しようとする革命の熱血が一挙にほとぼしって、揚子江を染めてしまう——これは江青夫人にたいしていっているわけですね。

こういう詩がたくさん出ているわけです。これは七律の詩ですがこういうものを見ても、やはり、事件が偶発的なものではなかったこともわかるし、かなり自覚的な大衆によって伝えられていった、ある種のレジスタンスであった。香港の『明報』も言っておるように、現在の北京の市民は、この十年間の激動の中に、常に政治的訓練を経てきている。その市民が、自分がその行動に加われれば、どういう事態になるかということ、十分承知している市民がそこに集まったということの意味を重視すべきだということ、を言っているが、まさにそのとおりだろうと思う。

つまり、いまの詩などは、天安門広場にはんらんした詩文の中の一部分に過ぎないわけですが、最近の中国の若い学生などは、ほとんど漢字も上手に書けない、太字報の字なんか、誤字だらけで、これは日本の学生と同じなんだが、にもかかわらず、非常に見事な筆跡で、こういう詩が

『人民日報』のこの報道は、非常に含意が深いような気がする。

ちょっと脱線するが、つい最近、ポーランドの反乱事件について、『人民日報』が、いち早く大きく評価していることと共に、ひょっとすると、『人民日報』の中にも、いわば天安門事件にかんし、深部において、深層心理においては、共感する人がいるのではないかと思われる複雑な状況を示しておるが、幾つかのそういう詩などを通じて、私が申し上げたようなことは、明らかではないかと思うんです。江青夫人が天安門事件を伝えた『人民日報』の報道ぶりを激しく非難したとの情報もある。

その中で、私が特に興味深く思ったのは、かつて毛沢東が、一九五九年、あの彭徳懐と天下分目の論戦を行った廬山会議にちなんで有名な詩「廬山に登る」を書いておられます。

「冷やかな眼で、広々とした海に向かって、そして世界を見る」。

この「冷眼」にはいろいろの解説があつて、むしろ冷やかに見るといふことをもって、非常に批判的に、いわば反毛沢東グループを見下すんだという意味なんだそうですね。それから「熱風雨をふき」「江天」——揚子江の天に注ぐ——という詩があります。

この「冷眼」「熱風」というのは、一つの対句になって書かれている。おそらく、これは後に『人民日報』が批判したように、いわゆる反動的文人——いわゆる文化大革命以来、根こそぎやられたと思われた北京において、依然として存在しているこの文人たちが、インテリゲンチヤが、非常に大きな役割を果たしたと思われるわけです。

こういう構造があるような気がいたすわけです。そして、特にその事の一方で、周恩来を追慕する——周恩来というのは、常に国家的な使命感に立脚して、まさに公けの政治のために粉骨砕身し、天下国家に殉じた、大衆は思えば思うほど、その裏返しと申しましょうか、それと対称的に、いわば毛沢東家長体制の内部で、政治を私物化していると思われる姚文元、江青の批判が激発した、こうみていいわけではないかと思う。

つまり、文化大革命対反文化大革命、毛沢東の中国対「もう一つの中国」——あるいはそれは、周恩来の中国——といつてもいい——この対立構造こそ、今回の事件の基本構造であったと思われるわけです。

走資派・鄧小平批判で処理

このことを、党中央は決して明白に認めるわけにはいかない。従って、それを走資派批判、鄧小平批判という形で、いわば処理したわけです。

しかも、本来これら造反であれ、なんであれ、集会やデモの自由があるはずにもかかわらず、いうまでもなく、こういう大衆の反乱のあとに待ち受けていたのは、徹底的な鎮圧でしかない。

この鎮圧ぶりも、あとでお話しするように徹底していた。首都民兵などが、非常に讀えられて、今日の中国の中で、民兵の役割がひととき目立っておるわけですが……。

例えば事件当日の九時半ごろ命令が下るわけです。命令が下ってからは、この首都民兵、工人民兵などが一挙に飛び出して、群衆をさみ打ちにして、徹底的な鎮圧をする。

『人民文学』（一九七六年第三号）に、その辺の様子が割合詳しく出ていて、そういう意味では興味深いんですが、そういう状況があるわけです。

結局、そういう状況の中で、党中央の決定が翌々日出される。そしてそれを支持する官製デモや、各級、各分野の決議も出そうわけですが、この官製デモにしても、北京からの報告によると、ほとんどが大人が参加しない、子供のデモが多かった。そして人民解放軍のデモは、遂になかったようです。

このことは、逆に軍はウェイト・アンド・シーであった、軽々に動かない、であるがゆえに、文革派が動かしやすい民兵に依拠せざるを得ないという現在の状況があるとも、河南省であるとか、雲南省等々各地で起こっていたわけです。死者が出たという報道もすでにあったわけです。

ソ連大使館爆破など統発事件

そういう中で、これも真相はよくわからないが、例のソ連大使館爆破事件というものがあったわけです。これは新聞報道にもあったが、考えてみると、大変な出来事であるかもしれない。

ただ一部の北京からの情報によると、中国では、最近かなりひんばんに、こういう爆弾事件や火災が起こっているわけで、必ずしもソ連大使館事件を、意図的に取上げる必要はないのではないかとという見方もあるが、しかしながら、かなり衝撃的な事件であったことは事実です。

ソ連の側がこれをどう見ているかというと、極左派の仕事であるというふうに見ているようです。

特に五・一六兵団の残党が、今日の北京ではかなり残っているようですし、恐らくそれらのグループも、今回の事件に加わったのだから、最近紅衛兵が農村に下放される、それから戻ってくる、戻ってくるけれども、ロクな勤め場所もないという状況が、幾つか報告されているわけだから、そういう状況の中で彼らは、かつてのわが国の全共闘くずれがルンペン化し、墮落しているみたいな状況にな

思うが、こういうふうな雰囲気を示しているような気がします。

結局、事件というものは、幾つかの不満がいれば、つってああいう形になり、それは主として、周恩来路線に対する評価の問題が、背景にあったと思うわけだが、そういう形で出た事件が、再びこういう形で処断される、そのあとに残るのは、ある種の政治不信、脱政治、しらくらモードであるわけです。そういう中で、外電が伝えているように、事件に加わった人たちはすでに銃殺されたり、三十年の強制労働に何人か処せられたり、あるいは——これは台湾系の情報ですが——約一カ月の間に三千六百四人が北京衛戍部隊および工人民兵につかまっています。その中には、例えば外交部副部長馬文波の息子、それから天津市党委員会第一書記、解学恭の息子など、軍および國務院の高級幹部の子弟が、かなり含まれているわけです。

未確認ですが、かつて造反外交で鳴らした前インドネシア大使姚登山の息子も加わっていて、彼は銃殺されたという外電も、ご承知のとおり、あったわけですね。

こういう状況の中で、中国は、一口に言えばそういうしらくらモードの中にあつたような気がする。そして、どうも各地でいろいろのことができ、ひん発をしている。そのできごとというものは、必ずしも、すべて系統的に結びつくわけではないにせよ、天安門事件と同じような事件

っている。そして良家の子弟が多いようですね。

しかしながら、彼らはそういう形でのさばっているんだが、聞くところによると、軍や公安も、彼らを街で見かけても、それを避けて通り、下手に手出しをしないような状況があるわけで、大体そういう状況の中で事件が起こったと考えると、いいような気がする。

ソ連大使館は、ご承知のように、北京市の東直門近くにあるわけですが、私はそこを現場で見たわけではないが、ソ連大使館の前を通ったことはある。それだけの印象からだが、本館までの間は大体百メートルぐらい離れているようである。道路からずっと細い小路を入って、はじめて大使館の本館にいくんですね。その百メートルの間の、真ん中に門があり、そこで厳重にチェックされる、爆弾が爆発したというところは、正門のところ。その爆風などが、大使館のガラスなども打ち破っただけです。

いずれにせよ、そういうことは、そんなところにある爆発物ではできないわけで、これはやはり軍用の火薬を使ったというふうに、我々しろうとが考えても、考えられるわけですから、こういう状況が、ともかくも起こったというところは、何らかの意味で、最近の一連の政治不信の状況というものと、無関係ではないような気がする。

それから大慶の油田の爆発という事件があるわけで、これも、五月二十五日のUPIワシントン電などが伝え、そ

れを否定する意見や肯定する意見が、いろいろある。

もちろんこれについてもわからないし、大体この大慶油田というのは、みな地下にあるそうだから、爆発といって、表から見えたかどうかという疑問もあるが、『紅旗』第五号に、大慶油田の呉全清という鉱員が、「階級闘争は、これまで消滅しなかった」という論文を書いており、その論文を見ると、大慶でも激烈な階級闘争があった、一握りの階級の敵は、破壊活動を行なっている。大慶には資本主義を生む土壌があるという。いわば「工業は大慶に学べ」というそのモデル地区である大慶にさえも、この問題をにおわせるような、そういう不穏な状況があったとするならば、事態はやはり深刻かもしれない。

同じようなことかもしれないが、五月十三日の夜リー・クアンユーが北京を訪れているわけだが、朝日の田所記者が、北京駅の近くで不審火があるという報道をしている。田所氏は私の友人ですので、彼の報道ぶりを見ていると、やはりそこはかなり意味を含んだ報道ではないかという気がする。

その後いろいろそういう事件が起こっている。それから最近の事件で注目すべきだと思うのは、七月十四日に新華社が発表した、福州軍区司令員の皮定鈞の死、地方軍区の中で注目されていた軍人ですが、『人民日報』は十五日付けですが「七月七日の正午殉職」という発表があった。こ

とになっているわけですが、確かに幾つかの問題があるわけです。

中央委員会が果して開かれたのかどうか、そして、それをなぜ中央委員会の決定として発表する必要があるのか、しかも、これは国内には発表されていないわけで、外交部を通じて、外国にのみ発表している。その前後に新華社が毛沢東の写真を流しているというような問題——いろいろあって、幾つかのなぞを秘めている。

私は、この問題と関連して考えるべきことは、毛沢東のめいといわれる王海容と、アメリカ帰りの唐聞生が、ずっと毛沢東の身の回りの面例をみてきたわけですし、通訳兼秘書、兼さまざまな役割を、多元的にやっていたと思うが、この二人が、確か、そのしばらく前に、クビになったというよりも、ともかくその職をやめて、いわゆる周恩来系だといわれるが、龔というベテランの外交官が通訳になっている、というようなところから、かなりの推測を生んでいるようです。

それらの推測を、ざっと見てみると、まず一つは死亡説でして、毛沢東はすでに死んでいるのではないか——これは台湾の呉俊才氏などが、秦始皇帝が死んでから、すぐに発表できなかった古事を持ち出して、言っているようすが——問題は、毛沢東が死んでいる場合に、それほど重要な事件を秘匿しおえるかという問題がある。中国が一つに

これは死後、発表までに一週間のブランクがあるわけです。

アメリカ筋、台湾筋などは、このニュースを重視しているようですが、これは、一方では、アメリカは衛星を通じた、福建省に、この七月初め以来、かなり大幅な軍の移動があった。スワ、金門解放ではないかというふうに、色めきたったそうですが、こういう状況を見ていて、「殉職」という、今までに例がないような発表をされた——今まで「殉職」という発表はないと思うんですが——そういう問題が起こっている。等々ですね。中国の中の状況が、ある種の、天安門事件以降の、私があげた幾つかの問題で触れたような雰囲気の中にあるような気がする。

そういう状況の中で、きょう（七月二十三日）の朝刊に出ていたが、外国の留学生が、北京以外に行かなくなつたといふニュース、あるいは宮沢発言もあるが、日中の間で、何の理由か知らないが、次々に外交交渉ができなくなっている。

毛主席の外国要人との会見中止

こういうようなことを含めて、六月十五日に発表された、毛沢東の外国要人との会見中止という問題を見てみたいと思う。

この問題は、ご承知のとおり、外交部が談話のような形で発表したわけでした、いわば中央委員会の決定というこまとまっているならばともかく、今の中国のように、状況が非常にシリアスな中で、こういう大きなニュースを秘匿し得るか。あるいは隠し切れるような状況であれば、何も隠す必要はないと思うんだが、ただ私が今申し上げた、天安門事件や一連の事件の中では、毛沢東が死んだら、今中国は大変困ることになるのではないか。非常に多くの要因が、一挙に出てき過ぎるというふうな、多くの不安材料を残す中に、今の中国があることだけは、どうも疑えないような気がする。

そこで、こういう死亡説というものが、かなり流布されたのではないかと思う。

先ほど申し上げたような、国民に対して心の準備をさせるといふ意見もあったが、これだとすると、外交部を通じてまず外に流したのはおかしいわけでした、党との問題を考えてみると、やはりもっと素直に解釈した方がいいのではないかと思うわけです。すなわち、毛沢東の健康状態が非常によくなっているということ、それで、これ以上老醜をさらすことが、もうできなくなっている状況ではないか。

例のパキスタンのブット首相と会ったときの、最後の写真を見ても、会見時間が十五分になっているのみならず、非常に無理が目立つわけだから、このことではないかという気がするわけです。

この問題に関連して、若干のインホームーションを申し上げると、六月二十三日のAFPが伝えているように、オーストリアのお医者さん——ワルタービックマイヤー博士が訪中したわけです。

きよりは、実は、私、五月にオーストリアの対中国文化連絡友好協会、およびその所属の現代中国研究院主催の、「中国と国連」という国際シンポジウムに招かれて、レポートしてきたわけですが、そのときにびっくりしたことは、ウィーンは、ある種の中国ブームで、ウィーンの政府も親中国なんです。恐らくこの医師が行くとなれば、この友好協会があっせんしているに違いないと思うのですが、私なども向こうに行つて、レセプションには、中国大使以下みんな出てくるし、アルバニアの大使も出てくる。つまり「中国勢」がそろつたのでびっくりしたが、そういう状況の中で、アメリカの医者にはやはり相談できないというようなどころがあつて、オーストリアの医師を呼んだのではないかという気がする。

それによると、パーキンソン氏病ではないかということだが、同じような情報は、イギリス大使館付きの医者が北京にいて、この医者が毛沢東の医師団の中に加わつていようで、それもパーキンソン氏病ということを言っているようです。

医学については素人なんです、かなりひどいわけで、

国が始まるかということを今待望している。

であります。ゆえに、そのような移行期、過渡期というものが始まるのではないかという期待が、どうも去年あたりから急速に出てきたような気がする。

これを中国では、「昨年の七、八、九の三カ月、右翼巻返しの風潮が起つた」というふうに、一連の論文で言っているわけですが、その中で杭州事件というものを、捉え返すことができるような気がする。

一年前にこの研究会で、「杭州事件から『水滸伝』批判へ」について、ご報告申し上げたと思うが、やはり、あの事件の背景にあつたもの、中国社会の底辺が要求しているもの、それにいわば走資派——鄧小平を中心とするグループ——というものが、その潮流というものを、将来の、毛沢東以後において生かそうというふうに考えていたわけ

です。そういう状況があるから、世論の動向が、非常に急速に動いていく。

そして小さな流言蜚語がとんだり、街頭消息が飛んだり、情報が情報を生んで、社会の風潮が、フワッと動いていくような事態があつたのではないかという気がする。

そのことは、例えば、『学習と批判』の六月号に、鄧小平の「反文革と世論構成」なんていう論文が出ていますが、これなどを読んでみると、いかに、走資派が、世論いわば

特に春と秋が危ないということです。

新たな潮流

そんなことから、ひょっとすると、この秋に、ということがあり得るかもしれないが、何となくそんな状況ではないかという気がするわけです。リー・クアンユーと毛沢東との会見は、英語でやつたそうですね。リー・クアンユー首相は、マレー語もできるし、中国語もできるし、英語も非常にうまいわけだが、これを何でやるか、興味津津だつたんですが、英語でやつた。ということは、つまり通訳を入れてやっているということにして、その辺から見ても、やっぱり状況は、かなりシリウスなものがあるのではないかと気がするわけです。

そこで、そのような問題の中で、一連の状況を、もう一度振り返つてみたいと思うわけですが、昨年の水滸伝批判以来、あるいはその前の杭州事件以来といつてもいいと思うが、中国国内には、いわゆる右からの巻返しの風潮というものが出てきたわけです。

最近日本に里帰りしてきた人の話などを聞くと、中国というのは、何か一つの潮流が出てくると、人心がフワッとそちらの方に行くような状況にあるという様子です。

このことは、中国社会が、ある種の毛沢東体制の末期症状になつていって、すべての中国人が、いつから新しい中

民心をつかんでいたかということ、つかんでいたというのは、ちょっと言い過ぎであれば、民心の動向を、かなりキヤッチしていったということですね。

恐らく鄧小平ほどの人物ですから、それをキヤッチし得る幾つかの情報チャンネルと、状況を見る能力を持っていたわけ、であるがゆえに、彼は最後まで悔い改めなかつたわけ

です。しかも、恐らく、それは毛沢東以後の中国へのすて石になるつもりで、彼は最後まで悔い改めなかつたのだと思うが、そういう状況があつたような気がする。

最近、鄧小平については、単なる陰謀集団ではなくて、一つの綱領を持った組織であり、いわば政治集団であるということから、例の三つの綱領——「全党、全国の諸活動の動向について」、これは三つの指示をカナメにする立場からの、政治的なプログラムと、これを個別に実践するための条例——二十カ条といわれる、鄧小平の「工業発展を進める若干の問題に関する条例」——を持っていた。

それから、「科学院の活動報告大綱」というものを持っていた、といわれている。

つまり、この科学院というものも、天安門事件もそうだが、周恩来に、いわば花輪を捧げた——花には、全部どこどこと、自分の名前が書いてあるわけだが——、科学院が非常に多いんです。中国のインテリたちの支持をも受けて

いたわけです、こういう基盤というものがあつたような気がする。

そして、こういう、いわば潮流というものは、実は周恩来氏の死という状況の中でも、依然として、むしろそちらの方が、本流ではなかったのか。であるがゆえに、鄧小平はあの弔辞を読んだわけですね。

鄧小平の弔辞

冠婚葬祭に敏感であるはずの中国人社会において、だれが弔辞を読むか、世紀の宰相の死を、だれが見送るか、みとめるかは、一番大きな関心事であると思うが、それを、ご承知のように鄧小平が弔辞を読んだわけです。

鄧小平の弔辞は非常に傑作でして、文化大革命を、明確に位置づけていない。そして例えば、康生であるとか、多くの要人の死と較べても明白であることは、周恩来の業績を、特に建国後についてはほかしてある。建国前の部分は非常に詳しく例えば、一九二七年にどういうことをしたというに触れてあるにもかかわらず、建国後については、ほかしてある。

今日の中国において、文化大革命の偉大な勝利という言葉は、常に言われなければならない形容詞であるにもかかわらず、あの長文の弔辞の中で、たった二回しか、文化大革命に言及していない。

なくて、もう冒頭から、折衷主義批判の論文が掲げられている。中国において折衷主義といえ、周恩来を指すことは、いうまでもないのです。

日本語で出ている『人民中国』なども、四月号ですが、毛沢東の、元旦の詩を表に刷り込んで、周恩来とあれほど関係の深かった日本の読者に、周恩来の死を非常に軽視したような編集のし方であるわけです。

その中で、これは余談になるが、三木さんが公式の談話の中で、『中国の偉大な指導者周恩来総理』という発表をしたことは、恐らくは、文革派をいらだたせただろうと思う。「偉大な指導者」という言葉は、毛沢東以外には、言っていないわけだから。

従って、三木さんの弔電は、今度は、アフリカのガーナかなんかの首脳と並んで、小さく並べられているというところにも、周恩来を「偉大な指導者」という形で、イメージ・アップすることが、いかに中国の文革派にとっては、危険の多いことであるか、いらだたしいことであるかという雰囲気があつたと思うのです。

そうであればあるほど、中国の民衆の中には、周恩来に対する追慕の情が深まっていく。

事件発生まで

簡単にお話すれば、一月下旬から二月上旬にかけて、三

そして最後には、中国を、近代的な工業体系の備わった国にするために、粉骨砕身しようではないかというふうになり、結んでいるわけです。

それを聞いていた文革の指導者たちは、内心非常にいらだつたと思う。

そこで私は、鄧小平がまさに、一月十五日の周恩来の葬儀以来、表面に出なくなったということの意味があるような気がする。

ところが北京からの情報によると、一月十九日に、葬儀のあとに、各地から供えられた花輪が、やっぱり撤去されたという事件がすでに起こっているんですね。

どうもそのあたりから、私どももぼつぼつ気づいていたんですが、いわゆる文革派ないしは現在のメディアをにぎっている人たちは、周恩来の死を、あるいは周恩来の死を悼むセレモニーを、これ以上全国各地に拡大したくないという風潮が見えるわけです。

『人民日報』の中には、各国からの弔電などが来たので、それを二月の五日まで載せてありますね。

しかしながら、それ以外には、世紀の宰相が亡くなったにもかかわらず、周恩来を悼むような文章などは、まったくないわけですし、前にもちょっとお話したと思うが、周恩来死以後の、最初の発行の『紅旗』、および『学習と批判』それぞれ第二号ですが、それには、恩周来の周の字も

中全会と思わしきものがあつたらしいが、これは決裂したともいわれている。一説によれば、朱德などが、そこで張春橋首相説に反対したとか、いろいろいわれています。ともかく、そこで妥協が行われて、華国鋒が登場する。

二月八日、そのことが明らかになるが、二月七日から、つまり、それと同じ時期に、走資派批判がわき上がっていきつづけています。

すでに、この頃の一月下旬には、周恩来の死をこれ以上大々的に追悼してはいけないという、党中央の指示が出ていたというような情報もあるわけです。

こういう状況の中で、走資派批判のキャンペーンが進んでいった。

しかしながら、しばしば申し上げましたかと思うが、走資派批判のキャンペーンというものが、一向にわき上がらない。そして『人民日報』などを見ると、あちこちで走資派批判が高揚しているように見えるが、それは、例えば清華大学とか北京大学とかいう大学のキャンパスであるとか、それから大衆生産大隊であるとか、大慶油田であるとか、いわば文革派の拠点でしか、走資派批判が起こっていないわけ、全国的なレベルで見れば、走資派批判は、どうもそれほど盛り上がっていないという状況があつた。

三月の下旬ぐらになると、状況はむしろ、こう着する。どちらかというと、いわば反批判が出てくるというわ

けです。

例えば、日本の外交団なども、三月の終りに清華大学へ、見学に行っているが、そのときに、大使館員が受けた説明でも、「鄧小平打倒というところまではとてもいらない、問題はそんなことではない」と彼らは説明している。そして、この三月の終りごろになると、南京あたりで、周恩来を批判したとして、上海の文滙報が吊るし上げられるという状況がある。

そのため南京から北京へ来る汽車に乗れなかった外交官がいるようです。

そういう状況が各地で起こっている。いってみれば、こういう状況の中で、天安門事件というのは起こったわけです。

しかも、四月になれば、何か起こるのではないかということが、さっきの流言蜚語みたいに、フワッと北京に流布していた。

現にあれほどの規模の、花輪なりが、そこに集中するということは、すぐにできるはずはないわけで、例えば、清華大学、北京大学のような、走資派批判の拠点といわれるところでさえも、学生たちは、四月に入り、みんなが立看板をつくり、学校に残ってスローガンを貼ったり、写真を作ったりしているわけですね。

そして、その三日の日、つまり清明節の前日にも、す

える周恩来の碑文が刻んである。つまり周恩来のモニュメントですね。

天安門の城壁のまん中に、中国の国旗がある。その国旗の下に、天然色の毛沢東の大きなポर्टレートがあるが、広場をはさんで、周恩来の写真が、毛沢東の写真と対峙する形で、英雄記念碑の上に吊し上げられた。これが一番のクライマックスではなかったか。その瞬間に歓声が起こり、毛沢東を讃える歌に慣らされていた中国民衆の中から、久々にインターの合唱が起こった。

それから、新聞によると、「周恩来万歳」の叫びがあったというんです。死者に対して万歳を言うことはない。死者に対しては「永垂不朽」という言葉があるわけだから、万歳を言うはずはないと思われるのだが、万歳という叫びがあがったというんです。

これはやはり大変なことだと思えます。万歳ということとは本来、毛沢東以外に供えてはいけない言葉である、亡くなった周恩来に対して、周恩来万歳と言った——これが一つの大きな象徴ではないかという気がする。

だとすれば、おのずとこの事件の性格は明らかであった。ですから、要約するならば、周恩来の死を悼みたくないという、あるいは周恩来に非常に冷たくしていた、文革派に対する、大衆の募る不満というものが、一挙にそこに出ていったという気がするわけです。

に天安門広場に、多くの人が集まってきているわけです。二日には、「紅の心は、もう一べん革命をやらなければすまない」というような詩が、例の英雄記念碑の上に掲げられている。

それで四日に、ご承知のような状況があって、その夜、花輪が撤去されることに驚いた連中は、五日の朝——大体七時半から八時ぐらいの間、公安局の車をひっくり返すような形で、状況が険悪のものになっていって、十時ごろ暴動化していくわけですね。

事件のクライマックス

いずれにしても、非常に大きな暴動——人数は日本の新聞の『毎日』、『朝日』、『読売』がそれぞれ違うが、少なくとも数十万から百万の単位、最後の場面、いわばクライマックスには十万以上の人口が集まっていたということは、やはり大変な事件であると考えざるを得ないという気がする。

そこで、この事件のクライマックスは何かというと、私が申し上げるまでもなく、人民英雄記念碑というのは、たしか台座が四十五メートル、高さが四十三メートルあるわけです。花崗岩でできた白い大きな石碑でして、表には毛沢東の字で、「人民英雄永垂不朽」と書いてあるんですね、裏は阿片戦争以来の中国革命の犠牲になった英雄を賛

しかも、それは、恐らく、四日の晩に花輪を撤去するという事件が起こらなければ、五日の事件は起こらなかつたかもしれない。しかしながら、それを撤去した、ということにおいては、あるいは、そこに文革派の挑発があつたかもしれない。

しかし、ともかく清明節に故人をしのぶということは、許されるわけだから、許容される範囲において、なんとか自分たちの意思を表示しなければならぬという、そういう北京の民衆の、つੱつた気持が、あそこに表われたものであつた。

以後を規定する民衆の意識性

ただそれが、花輪が撤去されたという状況の中から、暴動化するまでの間には、幾つかの触媒があつたと思うし、あるいは挑発があつたかもしれない。

その辺を詮策するのは、私の任務ではないんですが、ただ鄧小平が初めから仕組んだ芝居であるならば、こんなことをすれば自分の運命がどうなるか、わかっていたわけですし、状況は、むしろ文革派にとって不利である。一般的な状況は、毛沢東の生命に依存している文革派にとって不利であるはずです。

そしてまた、鄧小平は批判されてもなかなか失脚せず、三月下旬あたりは、状況がこう着して、むしろ反撃せんば

かりの状況があったわけです。

それが自らの墓穴を掘るようなことをするはずがないわけです。

その辺は、ある一定の群衆心理みたいなものがあつたかもしれないが、ともかく天安門広場に集まつた民衆は単なる付和雷同でもなければ、烏合の衆でもなかつたというところに、この問題の大きな意味があると思う。

そういう意味では、この天安門事件が残したものは、事件としてはこれで処理されたと思うが、やはり今後の毛沢東中国というものを考える上で、大きな幾つかの意味を持つてであろう。そして、その詩の中に現われたような、あるいは科学院のインテリたち、つまり現在の中国はこれであるのかという、彼らの切羽詰まつた気持、そういうものが、今の中国の中で非常に潜在し、それがある種のサーキュレーションをもって、拡大再生産されていくものとするならば、そういう中で、やがて徐々に形成されていくであろう中国の民衆の意識性というもの、そういうものが、やがて来たるべき、毛沢東以後の中国を規定していくのではないかという気持がする。

そういう意味では、周恩来死後、短期的には、私どもの予測をはみ出た事件が中国に起つたが、長期的には、この激動があつたにもかかわらず、むしろ中国の行くべき方向は、おのずと、ある種の社会的、国家的要請というものに

合致する方向、そういうようなリーダーシップが、いずれは出てくるのではないか。もちろんそれまでには、今の状況が、まだこういう状況であるだけに、一揺れも二揺れも、非常に大きな流動があり得るといふ気がするわけです。

(昭和五十一年七月二十三日のアジア調査会アジア研究委員会での報告記録。文責 〓編集部)

